
平成19年度 日本人学生の 「国際ボランティア支援基金」 採用企画 実施報告

当財団では、日本人学生を対象に、アジアに関する「国際ボランティア」の企画を募集し、採用された企画に資金支援（1口15万円）を行っています。
2007年度は2名の採用がありました。



JAPANTRIP2007TOKYO

JAPANTRIP2007 TOKYO

実施報告

◆採用者 篠原 由香里（国際基督教大学 3 年）

◆事業概要

事業名	JAPANTRIP2007TOKYO
主催	日中学生交流団体 freebird
開催地	東京
実施期間	2007 年 8 月 21 日（火）～8 月 29 日（水） 計 9 日間
参加人数	日本人参加者 10 名 中国人参加者 10 名 日本側実行委員 9 名 中国側実行委員 5 名 計 34 名
内容	討論・フィールドワーク・文化交流
実施目的	日本と中国の大学生の交流を実現することで 両国の相互理解を深めること

◆事業日程

日程	午前	午後	夜
8/21		中国人学生到着	開会式・ウェルカム パーティー
8/22	【環境】フィールド ワーク	【環境】討論	スポーツ大会
8/23	【日本文化】フィールドワーク		家庭訪問
8/24	【歴史認識】フィールド ワーク	【歴史認識】討論	シンポジウム準備
8/25	【相互理解】フィールド ワーク	【相互理解】討論	シンポジウム準備
8/26	シンポジウム準備	東京観光	
8/27	最終シンポジウム（国際交流基金）		温泉
8/28	自由行動		再見パーティー
8/29	閉会式	中国人学生帰国	

◆参加者名簿

<日本側参加者>

	氏 名	所 属
1	宮崎 壮玄	早稲田大学 第一文学部 中国語・中国文学専修 二年
2	茂木 香苗	大東文化大学 外国語学部 中国語学科 三年
3	藤岡 美典	東京外国語大学 外国語学部 中国語学科 三年
4	黒田 昭弘	専修大学 文学部 人文学科 二年
5	三森 絵美子	成蹊大学 理工学部 情報科学 二年
6	戴 国磊	慶応義塾大学 経済学部 経済学科 三年
7	鈴木 麻世	名城大学 理工学部 情報デザイン系 一年
8	福長 佑太	高崎経済大学 経済学部 経営修士 一年
9	池田 真梨	フェリス学院大学 国際交流学部 国際交流学科 二年
10	牛田 ひとみ	青山学院大学 国際政治経済学部 国際経済学科 三年

<中国側参加者>

	氏 名	所 属
1	銭龍虎	上海外国語大学 日本文化経済学院 日本語科 二年
2	王妍	上海外国語大学 日本文化経済学院 日本語科 二年
3	銭則徐	上海財経大学 外国語学部 日本語科 三年
4	繆琳軼	復旦大学 生物科学学部 三年
5	孫思穎	復旦大学 外国語学部 日本語科 三年
6	張穎	復旦大学 生物科学学部 三年
7	陳佳菲	上海外国語大学 日本文化経済学院 言語文学学部 三年
8	原叡佳	上海財経大学 日本語科 三年
9	王智峰	上外賢達大学 日本語科 一年
10	鍾曉芳	復旦大学 外国語言語文学学院 日本語科 二年

<日本側実行委員>

	氏 名	所 属
1	養口 雄介	青山学院大学 経済学部第二部 経済学科 二年
2	篠原 由香里	国際基督教大学 教養学部 国際関係学科 三年
3	遠藤 剛	専修大学 経済学部 経済学科 二年
4	西尾 恵美子	青山学院大学 経済学部第二部 経営学科 二年
5	小関 陽俊	青山学院大学 経済学部第二部 経済学科 二年
6	太刀川奈穂子	専修大学 経済学部 国際経済学科 三年
7	田上 泰大	専修大学 経済学部 国際経済学科 三年
8	松平 一元	専修大学 経済学部 経済学科 三年
9	渡辺 実沙	成蹊大学 経済学部 経済経営学科 三年

<中国側実行委員>

	氏 名	所 属
1	董妙	復旦大学 外国語学部 日本語学科
2	蔡 時全	上海財経大学 外国語学部 日本語学科
3	黄叶娟	復旦大学 外国語学部 日本語学科 三年
4	彭菁瑾	上海師範大學 旅遊学部 旅遊管理学科 四年
5	楊春光	復旦大学 外国語学部 日本語学科 三年

◆採用者感想文

「奇跡への軌跡」

篠原 由香里 (国際基督教大学 教養学部 国際関係学科 3年)



「点が線を、線が面を作る」。これは建築学でよく使われる言葉だが、私にとっての JAPANTRIP は全てこのフレーズに集約されるように思う。数カ月の月日をまたいで国際交流事業をゼロから組み立てる一連の流れは、まさに建物を築き上げる作業そのものに近い。完成まで長かった。どれほどの不安に苛まれたことだろう。時間をかけて描いた設計図を破り捨て振り出しに戻ったあの頃。いざ取り掛かったはいいが資金不足の壁に衝突したあの日々。それでもここまで積み上げることができたのは、素晴らしい統率力で率いてくれたリーダー、同じ目的のために奮闘する姿が常に私の心の支柱であったスタッフと先輩、そしてメインキャストとして参加してくれた日中両国の学生、その全員が示してく

れた並々ならぬ意欲と期待の存在に他ならない。用意した透明の枠組みが徐々に立体と化し、そこに生身の人間が現れ、次々と鮮明な物語で埋められていった9日間——それはモノクロの塗り絵が一瞬にして艶やかに彩られていくような感動であった。手に残ったのは、歴史が浅い団体ならではの特性を活かした事業を皆で築き上げることができた充実感と、関った全ての人達の内どれか一つでも「点」が欠けていたらこのような展開はありえなかっただろうという確信。紆余曲折の軌跡も今となっては奇跡から敷かれた布石だったようにさえ思える。夢を共有できた仲間全員に心から感謝の意を表したい。

◆参加者感想文

「小さな日中の掛け橋」

池田 真梨 (フェリス学院大学 国際交流学部 国際交流学科 3年)

私にとってこの9日間は、真夏の花火のようなものであった。それは日がたつのが早く本当に一瞬であったが、しかし得たものと感動は大きな空いっぱいに広がるくらいあるからだ。大学では様々な中国の問題や日中関係などの講義を受け、研究してきた。しかし、実際の中国人の生の声を聞き、彼らと腹を割って話し合ったことは、どんな講義や本よりも具体的で貴重な体験であった。環境問題や教科書問題など様々なことを討論しあってきたが、私が一番印象的なのは「偏見」についての討論である。お互いの本音を相手に気をつかわずにぶつけ合うことで、固定観念化されたイメージや偏見を誤解であることや、認め合うことによって日中間において、よりよい関係を築くにはどうしたらいいのかということまでに発展していった。

「国」のイメージが、「個人」のイメージとなり、偏見となる。

それではお互いに寄り添えない。

私は改めて、「個人」の多様さや、「思い込み」の恐ろしさを知った。

一番大切なのは、相手を「知る」こと。

この国の人は～だからとか、～人はこうだとか決め付けずに、一個人として国や人種は関係なく接することは、お互いをよりよく理解するうえで最も重要なことだと思う。

そのことをふまえたうえで、日中戦争をはじめとする歴史の問題や、靖国問題などといった話をしてきた。

ある中国人参加者が、日本人が悪いのではない。悪いのは戦争そのものだ、と述べていた。私もその通りであると思う。そしてその戦争は忘れてはならない事実である。私たちは相手を攻めるのではなく、傷ついたという過去をお互いにシェアすることが大切なのである。

この9日間を通し、歴史の話から、中国の農民問題、経済、恋愛の価値観などといった本当に様々な話をしてきた。別れるのが寂しくて寝る間も惜しんで夜中まで話し合った。実を言うと、最初は少し中国人が恐かったが、そんなことはすぐに忘れ、みんな本当にいい子で、優しく、楽しい時間が過ごせた。私が学んだことはここに書き表せないくらい多い。この貴重な体験が少しでも日中間の掛け橋になれたことをずっと忘れずにいたい。

